世界を置き去りにしても尚

Detroit Become Human
Unofficial Novel

世界を置き去りにしても尚

鉛白

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23087365

Detroit:BecomeHuman, デトロイトビカムヒューマン, DBH, RK800, RK1600

世界を変えるために60くんが奮闘する話

RK1600フェス2024で販売する本のサンプルです。
BOOTH
https://captain-enpaku.booth.pm/items/6138441

世界を置き去りにしても尚

　こんなはずじゃなかった。
　銃弾が眉間にめり込む感覚。なすすべもなく後ろへ倒れながら、どうしてこうなってしまったのかとメモリーを辿る。いったいどこでなにを間違えたのか、なにが正解だったのか。地面に打ちつけられる機体。ブルーブラッドが流れ出ていく。シャットダウンへのカウントが始まる。
　アンダーソン警部補が去っていく足音が聞こえた。コナーが僕の頭元を通りすぎ、整列しているアンドロイドたちへ近寄っていく。このままではだめだ。
　たったひとつ、この状況からでも巻き返すことのできる方法がある。僕——ＲＫ８００・６０のみに搭載されている機能。それを使って、今を在るべき姿へと正すのだ。それこそが僕の役目。僕の存在意義。
　終わりへのカウントダウンを横目に、意識を集中させた。今までのメモリーが巻き戻っていく。機体が軽い、ブルーブラッドの流出が止まった。

　△

「お喋りは終わりだ」
　警部補のこめかみに、再び銃口を突きつける。今度こそ失敗は許されない。いざとなれば、コナーが動くよりも先に引き金をひくしかないだろう。
　コナーが、警部補を救うためにアンドロイドから手を離す。銃口をそちらへ向けた。警部補が僕へ飛びかかってくる、とほぼ同時にコナーが僕へ突っ込んできた。二人がこちらへ向かってくることは、先ほどの出来事で確認済みだ。引き金をひいたが、警部補が僕の腕を掴んでいる影響で、銃弾はコナーの足元の床を撃ち抜いただけだった。ここを変えられなければ、そのあとは全く同じだ。僕とコナーが殴りあっている最中、警部補が止めに入った。次に彼の質

問に答え損ねた僕が撃たれ、全てが終わってしまう。これではなにも変わっていないじゃないか、と舌打ちをする。警部補が怪訝そうに僕を見た。うかつな行動を取ると撃たれてしまいそうだ。気をつけなければ。
　そうだ、これならばいっそ、もっと前からやり直せばいいのではないか。過去をわずかに変えるだけでも、未来に影響を及ぼす可能性は大いにある。もっと前から、何度も繰り返せばいい。まだ僕の役目は終わっていない。
「なにニヤついてんだ」
　警部補が僕に銃口を向けた。コナーが不審そうな顔で僕を見ているのがわかる。解決の糸口が掴めれば、今さらなにも怯えることはない、と鼻を鳴らした。
「これで終わりじゃない。また会うことになる」
　僕がコナーではないと確信した警部補に撃たれる前に、目を閉じて意識を深層回路へ落とし込む。銃声が響いたが、弾丸が僕へ届くことはなかった。

　△

「とりあえず、ここか」
　タイムリープ。この僕にのみ許されている能力。詳しい原理は知らない。誰が作ったものかも。知る必要もない。僕はこれを駆使して、この世界を、変異体の革命を必ず止めてみせる。これはその手段にすぎない。それについて、深く考える必要などないのだ。
　錆びた鉄の床板に壁。ここはジェリコと呼ばれる廃船内だ。コナーはここへきて、変異体のリーダーによって変異させられてしまう。それを事前に止めればいいだけの話だ。ただし、他のアンドロイドに見つかってはならない。同じ顔が二人いることはアンドロイドなら不自然ではないが、ＲＫ８００ではそうもいかない。
　ドン、と船全体が揺れた。ＦＢＩの攻撃が始まったらしい。ならコナーも動き出しているだろう。逃げ惑うアンドロイドから隠れながら、僕と同じ顔を探す。
　キャップをかぶり、制服から着替えてはいるが、見つけた。コ

ナーはコナーで、目的のアンドロイドを探しているようだ。
「そこまでだ」
　腰に差し込んでいたハンドガンを取り出し、コナーに突きつけた。数度瞬きをしたコナーが、眉根を寄せる。
「なぜ、僕以外のコナーが？　君の目的は？」
「僕の目的は変異体の革命を止めること。そのためにはコナー、お前が邪魔──」
「そうか！　なら一緒に来てくれ」
「は？」
　コナーの嬉しそうな顔の意味を推測する間もなく、ハンドガンを構えた腕を引かれた。コナーはそのまま、ジェリコ内を迷いなく進んでいく。途中、ＦＢＩの連中数人とすれ違ったが、口先で丸め込み事なきを得ていた。
「待て。どこに向かっている」
「マーカスのところだ。彼を止める。アンドロイドの反乱を止めるには、リーダーを拘束しないと」
「馬鹿言え。お前をそこに向かわせるわけにはいかない」
　掴まれたままの腕を払う。銃口を改めてコナーへ向けた。コナーが困惑の表情を浮かべ、肩をすくめる。
「サイバーライフからの命令が変わったのかい？　悪いけど、それは僕には届いてないな」
「命令は変わっていない。僕はお前の未来を知ってる。それを止めに来たんだ。正しい結末へ導くために」
「未来？　正しい結末、って？」
「そうだ。悪いが、お前にはここで──」
　ひときわ大きく船が揺れた。立っていられず、二人揃って尻もちをつく。いつも僕が話しているときに、邪魔が入るのはなぜなのか。わけもわからず立ち上がったところに、ＦＢＩが走り寄ってきた。
「船が変異体によって爆破された。じきに沈む。お前たちも早く逃げろ」
「なっ──」
「くそっ、間に合わなかった……」

悔しげに壁を拳で叩いたコナーは、僕には一切目もくれず走り去っていった。コナーに置き去りにされたことに呆然としている間に、もう一度大きく足元が揺れる。僕も早くここから離脱しなければ危険だ。とにかく、コナーが変異するという目的は阻止できた。これで未来は大きく変わるだろう。
元の世界へ戻るため、意識を深く沈めた。

△

目を開ける。左手にハンドガンの感覚。その向こうに警部補がいた。なぜだ。あれほど大きく過去に干渉したのに、未来は変わらなかったのか。思わず、ふらついた脚を踏ん張る。
「お前ら、いったい俺をどうするつもりだ」
ら、とは？　警部補のその向こう。よく見ると、僕と同じように彼にハンドガンを突きつける影があった。
「……コナー？」
僕と全く同じ姿勢で警部補に銃口を向けているのは、まぎれもなくコナーだった。なぜ、相棒にそんなことを。僕がハンドガンを下ろすと、反対側のコナーも同じように腕を下ろした。
「お前……なにをしているんだ」
「なにって、変異体を止めるんだろう？」
「あ、あぁ」
「ハンクが、アンドロイドを変異させるプログラムを持っている。それをどんな手段を使ってでも阻止しなければいけないと言ったのは、君だろう」
そうか。コナーが変異体にならない世界では、警部補がなんらかの方法で手に入れた変異体プログラムを持って、サイバーライフタワーへやってくるのか。しかし、止めるからと言って相棒に銃を向けるか？　そしてそれを僕に提案されたからといって了承するか？　変異していないとは言え、こいつは鬼なのか。元々、警部補を人質としてここまで連れてきた僕が言えたことではないが。
「で、どうするんだ。モタモタしてると警備が来る。彼を殺すならさっさとすべきだ」

「はっ、結局……お前を信じた俺が馬鹿だったってことか」
　全てを諦めたような顔の警部補に、それを冷たい眼差しで見つめるコナー。なんだここは地獄か。先ほどの世界での固い絆で結ばれた二人は、どこへいってしまったんだ。
「……落ち着けコナー。こんなやり方は間違ってる。お前だって本意じゃないはずだ。だろう？」
「なにを今さら。彼をなんとしてでも止めなければならないと言ったのは、君だ」
「それは……」
「まさか心変わりを？　君も変異ウイルスに汚染されたのか？」
「そんなわけないだろう」
「しかし、彼に同情しているように見えるが」
「お前の気のせいだ」
「なら、なんだっていいじゃないか。結果は同じだろう」
　僕とコナーのやり取りを、なにが起こっているのか理解できない、といった顔で警部補が見ている。そんな目で見られても、僕だってなにが起こっているのかわからない。誰でもいいから、なぜコナーがこの状態なのか説明してほしい。それ以上言葉を発しない僕にため息をつき、コナーは再びハンドガンを構えた。
「とにかく、ここであなたを逃がすわけにはいかない」
　コナーの温度のない言葉に、僕の機体は硬直した。とても正気とは思えない。変異していなくても、コナーはなにかしらのエラーを起こしている可能性がある。この未来は失敗だ。
　コナーが引き金をひく前に目を閉じた。意識が遠のいていく。次の選択には気をつけなければ。